

アトリエ 琉游舎 だより 168号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2023年12月20日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

新年祝祷会

2024年1月1日元旦午前10時半より琉游舎にて

★午前10時半より執り行います★

★近くて一番早い初詣 琉游舎の新年祝祷会★

★30分ほどの法要です 新年をお祝いいたしましょう★

★新しい一年が豊かで実りある年になることを祈念しましょう★

★新年にお越しいただいた方に琉游舎の手作り御守護を差し上げます★

●ご守護（お守り）はこれを持っていれば願いが叶うとか、安心安全に毎日を送ることが出来るということを保証するものではありません。もちろん頼みごとの依り代でもありません。持っているだけでは唯の紙切れです。

●お守りは「家内安全でありますように」「志望校に受かりますように」「事故を起こしませんように」という自分の誓いを、ちゃんと一年間忘れられないようにと見守ってくれるもの。私たちの誓いの備忘録であり見届け役のようなものです。

●一年の計は元旦にあり、でも三日坊主も人の常。そんな私たちを一年間密やかに見守ってくれる守護袋になればよいなと思っています。琉游舎でお待ちしています

御守護

琉游舎

12月・1月スケジュール

12月			木	金	土	日
			21 映画会 お休み	22	23	24
25	26	27	28 映画会 お休み	29	30	31
1月1日 新年祝祷会 10時半	2	3	4 映画会 お休み	5	6	7 写経会 13時半から
8	9 読書会 13時半から	10	11 映画会 お休み	12	13	14
15	16	17	18 映画会 13時半から	19	20	21

読書会

1月9日

1月23日

(火) 13時半

写経会

1月7日

(日) 13時半

映画会

1月18日

今年はコリーナの蓮池に飛来する鴨の数が例年になく多く、散歩のたびに鴨の姿を楽しんでいます。いつもは多くて20羽ほど、家族らしき二つほどが群れとなり、悠々と池を泳ぎ回っていました。今年は100羽ほどになるでしょうか。いくつかの群れがさほど広くない池の中を所狭しと、縦横に泳ぎ回っています。ある群れは岸に上がってひなたぼっこ、私が横を通り過ぎると一斉に飛び立って池に戻ります。また水に潜って何かを採っている様子も見えます。かと思えば縄張り争いでしょうか、I羽がもうI羽をものすごい勢いで追い立てている様子も見られます。池のほとりでつい足を止めて、鴨のすがたに見入ってしまい時を忘れそうです。温暖化のため越冬の場所をもっと南に定めなくてもよくなったのか、1月になり池に氷が張れば、もっと温暖な所に移動するのか分かりませんが、しばらくは鴨の姿を散歩の友として楽しみたいと思います。

鴨は稲や麦、冬場のキャベツを食べてしまう農業被害をもたらす害鳥です。一方鳥獣保護管理法によって勝手に捕ることが禁止されている保護鳥でもあります。害鳥と言われても保護鳥と言われても鴨にとってはいわれのないことでしょう。生きていくためには害鳥にもなり得るし、保護され続けている内に捕獲される危険察知本能を失ってしまうこともあるでしょう。人間生活や自然環境の変化で人間と他の生き物の関係も変わってくるはず。人間が食物連鎖の頂点に立っている限り食べるという行為を基準にして、人は他の生き物との関係を倫理や法律を作って調整し合い共存してきたのでしょうか。先日琉游舎の道を挟んだ所に仕掛けられた檻に猪が捕らえられていました。朝玄関を出ると何かかがぶつかる音がしていたので山側を見ると、猪が罠の檻に入っていたのです。朝の薄暗い中、猪が出口がないかと必死に檻に体をぶつけて脱出しようと暴れ回る音でした。市役所に連絡をすると程なく猟友会の方が来て、手際よく檻ごと搬送していきました。山を下りたところにある田んぼや畑を荒らし回っていた猪のようで自分の家の作物も被害に遭ったと猟友会の方は語っていました。まさしくこの山里で生きていくための人間と猪のあたりまえの営みが、私の目の前で繰り広げられていました。猪を捕らえる人間とそこから逃れようとする猪。「かわいそう」などの情緒的感情が入る余地はありません。いずれあの猪は殺処分されジビエとして食料となることでしょう。食物連鎖の頂点に立つ人間の至極当たり前の行為です。生き物は人間にとり食料でもあるのです。蓮池の鴨たちを見てほほえましいと思う一方、おいしそう、食べてみたいと思ってしまう私は不謹慎な破戒僧なのでしょうか。

仏教徒の肉食は戒律で禁じられていると思われています。江戸時代まで日本人は獣の肉を公には食べることはありませんでした。私も35日間の結界修行中は肉も魚も一切口にしませんでした。肉食を忌避する考えは仏教特有のものではなく、多かれ少なかれ他の宗教にもあります。それは何らかの教義を根拠として禁止されているものなのでしょう。仏教徒の肉食禁止の根拠は不殺生戒（生き物を故意に殺してはならない）にあります。創唱者の釈迦牟尼は直接殺のみを明確に禁じて、間接殺のなかでも布施された肉で殺す所を見えない肉、自分に供するために殺したと聞いていない肉、自分の為に殺したと知らない肉の三つ（三種の浄肉）は食べても問題ないとししました。これは不殺生戒を犯していない肉だという理由です。浄土宗の開祖法然は「もし持戒持律をもって本願とせば、破戒無戒の人は定んで往生の望を絶たむ（もし戒律を守ることが本当の仏教ならば、戒律を守れない人は絶対に往生することはできない）」と選択本願念仏集で述べています。続いて「戒律を守る人はおらず、破戒の人がほとんどだ」とあります。親鸞聖人は「煩惱熾盛の凡夫」と自らを規定し、肉食・妻帯という破戒僧の行為を宣言しています。日蓮聖人は本人は肉食も妻帯もしませんでした。檀信徒の肉食は認めており、また本人は酒を好んで飲んでいました。私は肉食も妻帯も飲酒もする僧侶です。仏教の目的は心安らかに毎日を送ることにあります。安らぎの実現が「救われる」「悟る」ということです。戒律を遵守することが目的ではありません。破戒者の自覚こそが悟りへの道と観た法然も親鸞も日蓮も、戒律を守れない凡夫がどうすれば救われるかを希求し続けて各々の宗派を開いた宗祖なのです。

戒律は悟りの手助けをしてくれる手段と考えます。今まで「戒律」と表記してきましたが「戒」と「律」は元来異なるものです。「戒」はさとりを目指し個人的に課す決まり、良い習慣、道徳的行為です。「律」は僧侶の集団生活上のルールです。「戒」は仏教徒の心構え「律」は僧院内の法律なのです。釈迦牟尼が創唱した原始仏教から小乗、大乘仏教と多くの戒律が設定されてきました。信徒と出家者、社会と僧院の関係性の中、教えの維持のために双方が必要とした結果が多く複雑な戒律が定められた理由だと思われます。私は詳細な戒律の知識は全くありませんが「五戒」と呼ぶ戒だけは仏教徒の基本的な心構えなので理解しています。不殺生戒（生き物を故意に殺してはならない）不偷盗戒（他人のものを盗んではいけない）不邪淫戒（不道徳な性行為を行ってはならない）不妄語戒（嘘をついてはいけない）不飲酒戒（酒を飲んではならない）の五つ。私は既にこの五つのうち不飲酒戒を破っています。また不殺生戒も畑を荒らすバッタや蚊などは殺生することがあります。不妄語戒も守られているか怪しいものです。僧侶の私は五戒すら守ることができないのです。親鸞も日蓮もこの自覚から出発して安らぎの道を歩んで行きました。五戒すら守ることができないという自覚が私たちを仏の道へ歩ませるのです。戒律の存在意義はこの自覚にあるのです。

人間と自然との関係が現状と合わなければ必然的にそこに関わる法律や倫理観も変化するはずで、同じように私たちの信仰も社会の現状が変われば、変化していく必要があるでしょう。私たちはこの社会以外の場所で安らぎの日々を送ることは不可能だからです。私は信仰の原理を守るとの言葉を叫び実行する人々に、信仰の枝葉末節に拘る頑迷さを見てしまいます。その信仰は社会にも信仰者にも不幸をもたらすでしょう。